伊勢三座

～春の神舞～

ふるさとの風
～弥生～

花見にと　群れつつ人の　来るのみぞ
あたら桜の　咎(とが)にはありける
西行桜　「山家集」より

能の名作“西行桜”は世阿弥の傑作のひとつである。

伊勢の能楽は平安時代、呪師(しゅし)といわれた頃に始まる。
古くは伊勢三座と称される猿楽の座があり、毎年新年には各大夫が神宮に参拝し、祈祷祝賀の神楽と翁舞を奉納していたという。
世阿弥の『風姿花伝』第四神儀にも次のような記述がある。
「伊勢主司二座、和屋・勝田、又今主司一座在」

伊勢三座は南北朝時代、伊勢の神領であった神三郡の地で、伊勢国司北畠氏の庇護を受け大いに発達した。しかし室町時代末期、北畠氏が織田信長の勢力に滅ぼされると、三座は伊勢神宮を頼り、和屋座は一色の里へ、勝田座は通村、青学座は竹ヶ鼻村へと移り住むことになる。やがて青学座は途絶えるが、残る二座の系流は今も継承されている。

―翁は能にして能にあらず―
翁は他の能とは大きく趣を異にし、能の原点を示す儀式性・神事性の高い秘儀である。

和屋座の流れを汲む一色の能楽の最初に必ず行われるのがこの翁舞であり、神楽・翁・三番叟で構成される。神楽は他の流派には存在しない演舞であり、呪師の芸能を引き継ぐ一色能そのものを意義付ける大きな役割を担っている。
一色の翁舞は国の無形民俗文化財に指定され、今もなお人々に語り継がれている。

弥生 ―――　一色の里

神の化身としての翁が天下泰平を寿ぎ
五穀豊穣を神に祈る―――

「総角(あげまき)や・・・」

伊勢の國、常世の波が打ち寄せる海からの風は
もう春・・・

◆ 一色の翁舞　調査報告書　（伊勢市教育委員会／編　伊勢市教育委員会　L773／イ）
◆ 神都名勝誌　巻一～巻三　（神宮司廳／編　皇學館大学　L243／シ／1）
◆ 日本の古典をよむ 17　風姿花伝・謡曲名作選　（小学館　918／ニ／17）

図書館だより
2011年3月号より